

## 仏教に於ける他界観

著者	ベッカー カール
雑誌名	日本人の他界観
巻	3
ページ	37-64
発行年	1994-03-31
その他のタイトル	Bukkyo ni okeru takaikan
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00005780">http://doi.org/10.15055/00005780</a>

# 仏教に於ける他界観

カール・ベッカー

## 初めに

人間は、猿から進化した時点、もしくは遅くともネアンデルタール人種の三万年余り前から、「死」に対して恐怖感を持つと共に、来世に対する憧れを示し続けてきたものである。世界宗教と言われるものの全てが人間の何らかの「死後の存続」を語り、他界観を重視している。就中、原始部族宗教の様に、「あの世」はこの世と連続して行き来できる処にあるとされるものもある。また、キリスト教の様に、人間は死ねば二度とこの地上に戻れない、一方通行で全く離れた他界に移転する、とされるものもある。更に、ヒンズー教や仏教の様に、地上の人生が繰り返されるであろうと考える文化もある。仏教のみを取り上げる前に、まず来世観理論を簡単に紹介したいと思う。

## 来世観

心理学者は、全ての来世観は人間の生欲の願望に還元出来るだろうと言う。しかしその願望を意識しなくとも、人間は不思議と他界を考えさせられる体験をする。所謂「宗教的体験」と名付けられるものである。宗教的体験は、そ

れが何によって生じるかを別にして、全ての文化、時代、国等において人間が会合うものである。以下では、どのような体験に基づいて、どの様な来世観が出来上がるかという事と同時に、人間発想の理性にどの様な影響を受けて、来世観が進化したかという事をも考察しよう。

所謂「原始宗教」、アルカイック宗教の多くは、一回限りの人生の後、この世と連続する他界を考える。死者は、肉眼で見える様な肉体こそ持っていないが、生活その他は殆ど生前と変わらないと信じられている。肉体の変わりになるものが、微細見で、その微細見を持って、穀物を栽培し、獲物を屠殺し、食べて、愛し合って、彼岸で此岸と何ら変わらない生活を引き続けて営む訳である。そして彼岸と此岸とは密接に繋がっていると信じられている。ある山を越えれば、ある洞窟を抜ければ、あるいは海を渡れば、死者の国に至るとされる。他界した者が生存者を憎んだら、憎まれた生存者が病氣にかかり、不幸になるというので、生存者は他界者を恐れて、なるべく近付かない様にするが、彼岸と此岸の連続性を疑う余地は無い。又死後、死者は暫くの間、墓場や家の周りを彷徨う事から、定まった時期に亡霊を慰める為の儀式を生存者が行うのである。

日本の例で言うと、二通りの原始宗教的他界観が見られる。即ち大陸から渡ったと思われる地下説（黄泉の国、夜見とも書く）と弥生文化と一緒に黒潮に乗ってやってきたと思われる地上説（常世の国）である。起源はともかくとして、どちらもこの世とは連続的な領域であり、神話で見られる様に、古代日本人はその他界の存在を市子や神懸の体験を通して確信したのである。現在でも、沖繩のユタや青森のイタコがこの様な他界観に基づいて生き続けている。この様な他界観には、何の正義感も見られない。地上で偉かった者は、死んでもからも偉いとされる。他界は此岸の連続であるが故に、先祖と共に居られる以外に、何の魅力も無いし、地上の行ないに対して、何の賞罰も無い。ユダヤ教の他界観も正にこの通りであった。ところが、人間の正義感や正義に対する願望が高まるにつれて、生前の行な

いは死後に罰せられる、という様な信仰が現われる様になる。西洋においては、キリスト教やイスラム教がそうであるし、日本では、源信の『往生要集』や平田篤胤の神道でもこの様な他界観が伺える。つまり、本人の身分や地位ではなく、性格や生き方によって、来世の幸不幸が定まる、という考え方に変わって来る。この変化は単なる希望による仮説ではなく、やはりイエスや源信の様な聖者の瞑想による宗教的体験に基づいている。又、キリスト教などにおける天国や地獄の形と違って、「この地上では前世の罰を、来世では現世の罰を、受けねばならない」という、ヒンズー教的理論観が、特に東南アジアで信じられてきたのである。

この様な死後の裁きや善人救済は、人間社会の理論道德観を守る上でも最も有効な方法の一つと言えよう。人間は良い来世を期待し、「悪い」とされている行ないを避ける様にするからである。しかしながら、そこで心理的な葛藤は必ず生じる。幾ら善意で人生を送ったとしても、罪（自己中心的な行動）を犯さない人間はいないであろう。従って自分が本当に救われるかどうかに関しては、中々自信は持てない。そして一緒に暮らす家族や友人達に関しても、果して皆が同じ死後の国に入るのであろうか。寧ろ離ればなれになってしまう確率の方が高いとさえ思われる。

楽しい他界を目標に、良い行ないをする様に励ましてくれる筈の他界観は、逆に罰をも与えてしまうから恐れられてしまう存在に変わる。ヨーロッパの暗礁時代も日本の平安末期もそうであった。そこでその不安に耐えられない親鸞やルターが現われると、つい自力を諦めて、他力、願力、万物救済とまで来世観は変化していく事もある。この他力万物救済の無条件な信仰は、多くの市民には魅力的だが、同時に道德的な側面を損失してしまう傾向にある。なぜならば、他力によって、悪人も善人も同様に救われるのであれば、善行を行なう意欲を殆ど無くしてしまうからである。哲学者や仏教学者は改めて万物救済の来世観を疑い出す。少々単純過ぎるが、図化してしまえば、次の様な過程が見られる。



無関心／連続感／偉人崇拜／善人救済／全員救済／疑問

どの来世観に関しても、議論点が次の様になる。

- (A) 来世は有限か無限（永久）か
- (B) 善人救済か全員救済か
- (C) 正義感の有無（その説明）
- (D) 法則性の有無（その説明）
- (E) 自我の本質・連続の説明
- (F) 来世観の経験的根拠

ここで一般概論を離れて、もっと具体的に仏教の他界観に目を向ける事にしよう。

### 俱舍論の「来世観」

時代や地域によって、当然来世観は変わってくるが、仏教においても、以上の問題点は大変重要である。「死」と「来世」の認識は仏教にとっても、最も基本的な概念であるからである。仏教によれば、この世は生老病死の四苦である。もし死が「凡ての終わり」であるとするならば、死によって、苦しむ万物が四苦から解放される事になるであろう。とすれば、いくら苦しい人生でも、自殺さえすれば逃避出来るのであるから、何もわざわざ行を積まなくても宜しいことになる。又逆に、もしも地上の人生が一回限りのものであるのならば、いつかは死によって四苦から開放

されるのであるから、限られた人生の間、なるべく多くの楽しみや自己利益を求めて、僅かの間だけでも「派手にやる」という気持ちに成り易い事であろう。

しかし、釈迦はそのようには思えなかったのである。当時のインドでは、万物が繰り返し生れ変わると言う輪廻転生説が主流で、広く信じられていた。そして又、釈迦自身が瞑想中に前世を確認し、弟子達に説いたのである。輪廻転生が確實に有るのならば、必然的に四苦を繰り返し、半永久的に経験せざるを得ない。死んだだけでは、四苦を逃避出来ない訳である。そこで人は初めて、この世から解脱したい、悟りを開いて涅槃を得たい、という気持ちになるのであろう。そして、輪廻転生を考えれば考える程、増々その気持ちが強まるのである。半永久的にこの地上の行動を繰り返さなければならないのだと思えば、いくら好きな事でも嫌になるからである。従って、仏教の「悟り」の理論にとっても、「死」と「来世」は不可欠な根拠となっている。

一言で「仏教」と言っても、仏教ほど範囲の広い世界宗教や哲学は無いであろう。インドの原始仏教、現在の上座部仏教、中国仏教、チベット仏教、日本仏教等があり、そして各々の中にも様々な宗派や解釈がある。その全てを網羅することなどとも出来ないが、責めて仏教の他界観を広幅に扱い、且つ明確に表すものを取り上げるのが相応しいであろう。その意味において、取敢ず俱舎論の他界観を考えたいと思うのである。元々五世紀のインドで、世親(Vasubandhu)という哲学者が『阿毘達磨俱舎論』(Abhidharmakosha)を成立させたものである。『阿毘達磨俱舎論』全体は九品(章)に分かれている。初めの二章は法(dharma)の定義をし、次の六章は、迷いの世界と悟りの世界を各々明確に説明している。当時のインドの世界観の影響がなきにしもあらずだが、それは寧ろ仏教徒達自身の瞑想(観想)に基づくものと思われる。仏教が日本に伝わった六・七世紀には、俱舎論は中国仏教全体の基本とまでされていた。六五一―六五四年に俱舎論を中訳した玄奘(げんじょう)の直弟子道昭が初めて日本に伝え、天台宗の

最澄も重視したものである。特に奈良時代南部六宗の俱舎宗や法相宗の中で研究されたが、現在では、独立した宗派ではなく、仏教思想の基礎学として広く認識されている。

これ以上俱舎論を紹介する必要は無いであろうが、ここで注目したい事項は、俱舎論が示している肉眼では見えない様々な「他界」の存在である。目で見えない物だからといって、決してそれが全て同質の物とは限らない。様々な不可視物の中でも、俱舎論の仏教哲学に出て来る八位の種類を以下では整理してみたい。

## (一) 内なる「他界」

人間個人の存在は、色、受、想、行、識という五陰（要因）によって形成されるとされている。注目すべき事には、その内、目に見える物は、色（肉体）だけであり、五陰の残りの四つは、目で見えない側面である。敢て言うならば、喩え成長、老化、病氣、手術等によって友人の姿が変化してしまい、その姿が見違える程に変わったとしても、発想を聞いて、行動を見て、記憶を比べてみる事によって、久しく会っていない友人である事を確認出来るのである。又逆に、言葉や行動を通じて自分の人格を示さない限り、自分である事を伝えられないのである。示さない限り、自分の殆どが目に見えない存在であるが、その目に見えない性格が他人にとって、他界である。人間は皆自分だけの世界の中に生きているのであって、その自分の中の世界は他人にとっての他界と言えよう。否、行動する本人でさえ自分の潜在意識や行動パターンを認識しない事が少なくないであろう。しかし、その知らざる自分を知る事、そしてそれを超越する事が、仏教にとってきわめて重要な作業である。言ってみれば、一番身近な「他界」は、自分の無意識であるかも知れない。又、人間は死ぬ時に、色（肉体）だけが腐敗してしまうが、他の受、想、行、識は皆各々来生まで存続する。

## (二) 中有の「他界」

そこで仏教では輪廻転生という言葉をも簡単に口にするが、その輪廻転生も仏教にとって大変な問題である。なぜならば、仏教は不滅の自我を否定する立場を取っていると同時に、行 (karma) による個人的責任や前生来生を肯定するからである。人間が死ぬと、その自分を形成していた五陰はばらばらになるというのに、一体何が生まれ変わるのかという問題にぶつかる。又、人間は死ぬ瞬間に、その生命力や「氣」の様なエネルギーが次の胎児にたちまち飛び移ると言うのであればまだ理解し易いが、どうもそうとは限らない様である。瞑想を通じて、釈迦やその弟子達は人間が生まれ変わる様子を觀察出来たという。前の身体を離れて、次の胎児に入るまでに、かなりの時間がかかる例も有るとされる。(チベットの『死者の書』はその典型的な様子を明確に描くものである。)すると、「同じ人」と言う事が出来る為には、死者と胎児を繋ぐ、つまり前生と来生を繋ぐ、核 (中心) になる物が必要となってくる。

仏教では死と再生の間を中有と言い、一般的に四十九日の期間とされる。前生と来生を繋ぐ核は、長年にわたる仏教哲学の論争を引き起こした。人間のアイデンティティを保存する為に、ある学派は意生身体、ある学派は補特伽羅等と、中有に存在する物を仮定した。又その様な物が有っては仏教の理論に反すると論駁する学者も居た。俱舍論までくると、中有の存在は物ではなくて、記憶や潜在意識を含む「阿羅耶識」という事になる。中有の阿羅耶識は正に他界した存在であり、身体も形も無いが、確実にこの世に存在する (せねばならぬ!) ものである。記憶の中で、住み慣れた場所や埋まった墓道を彷徨うとまで言われると、一見幽身体や亡霊の様に連想されるが、そうではない。形の無い意識のみである。死体を離れた阿羅耶識は勿論、不可視ではあるが、この中有に置かれる他界は仏教にとって不可欠な存在である。阿羅耶識は新しい身体を捜し求め、生まれ変わる訳であるが、その次の身体は、人間の目にも

える人間や動物の様な存在だけでは限らない。

### (三) 地上の不可視物の「他界」

次に、目では見えない物だから現代科学には認識されていないが、仏教の世界観によると、我々の周りにも、多数の不可視物は地上（空中）に有るとされている。その代表的なものは阿修羅や餓鬼という種類である。阿修羅は普段、海底に住み、餓鬼も明るい所を嫌って、洞窟、深森、墓地に潜むけれども、場合によっては、人の前に現われる事も有る。だが物理的状況と精神的状況が合っていなければ肉眼では見えないとされている。滅多に見えない存在であるとしても、本質的に我々と違わないエネルギーや物質によって形成されている、肉体を持つ物として考えられているのである。謂わば未発見の物質や粗粒子で構成されていると考えられる。新しい放射線でも見つからない限り、この様な不可視物の存在は捕え難いものであるが、逆に無いという断言も出来ない段階である。ここで強調したい事は、阿修羅や餓鬼は、人間と同じ世界、時間、空間の中に生きている。そして人間も死んでからその様な存在に生まれ変わる可能性が有る、という仏教的宇宙観である。結局、六道の内、水中、地上、空中に生きる物の中には、人間道や畜生道だけではなく、阿修羅道や餓鬼道も共通に存在し、この四つの道は四洲と名付けられている。

### (四) 天上地下の「他界」

更に探してみると、天上にも地下にも不可視物があるとされている。日本語には、「天国」と「地獄」という言葉が有り、その様な領域が存在すると考えられているし、たしかにそこで生まれ変わる者が前生の行の賞罰を受ける運命にある。しかし西洋宗教で言うところの「天国」と「地獄」とは随分異質の領域である。キリスト教や回教の「天

国」と「地獄」とは、永遠的な物で、はっきりこの世とは切り離れた次元の物であるのに対して、仏教の欲天と地獄は、この世と連続し、同類の物質エネルギーで出来ているが故に、そこに住む者も一定の生涯だけをそこで過ごし、再び生まれ変わる運命にある。つまり仏教がいう欲天も地獄も四洲と同様に、サンサーラ、生老病死の欲界の一部分にしか過ぎないのである。天使として生まれ変わっても、いずれに必ず歳を取り、死んでしまい、生まれ変わる存在である。又地獄に苦しむ物も何れ生まれ変わり、動物や人間として生きる訳である。地下には八つの熱地獄があるとされ、それは等活、黒繩、合衆、号叫、大叫喚、炎熱、大熱、無間といった領土である。又、天も大きく分けて、六欲天に別れており、即ち四天王衆天、三十三天、夜摩天、都史多天（兜卒天）、樂變化天、他化自在天である。原則として、この天等が空より更に高い位置にあるが、三十三天は、北方にある須弥山と繋がっていると伝われる。上述した他界の天と地の連続、謂わば原始宗教的要因がここに残されている感じがする。この構造は俱舍論において完成し、俱舍論を受け継ぐ『無量寿經』や庶民レベルで大変人気を集める『今昔物語』等にも反映されている。

図化してみれば、人間が住む地球を一つの丸、あるいはサイクル、と描けるであろう。人間は地上のみに住むのに対して、畜生は水中、地上、そして空中にも住む。又、同じ水中、地上、空中に、（小さ過ぎるからか、波長が合わないからか）普段見えない阿修羅や餓鬼も居る。そして地下にも空上にも六欲道の生物が居るという事になる。経験的にこれを確認しようと思えば、謂わゆる瞑想中の体外離脱によって出来るとされてきた。逆に瞑想に入ると阿修羅や餓鬼が見えてくるが故に、瞑想が惑わされるとまで、釈迦が教えたのである。

## （五） 瞑想で見える四禅天（色界）

次元の低い瞑想の中で、物質的本質を持つ不可視物が見えると言われているが、瞑想が更に深まるにつれて、物質

的次元を越えて、全く物質を有しない次元まで見える様になると言われる。又これらも色（姿）の有る色界と、色も形も無い無色界に二分される。この色界と無色界は、欲界と合わせて、化土の三界を形成する。

一見、物質が無ければ、姿も有り得ないと反論する人が居るかも知れないが、我々は毎晩この様な現象に出会うのである。夢にも姿は有るが、物質は無いであろう。であるから、物質は無くとも、姿が有り得る訳である。しかし毎晩見られる夢の多くは、明らかに各個人の頭脳や意識の作用によるばかりで、確認出来る様な情報や事実を教えてくれない物である。これに対して、同様な訓練をすれば、瞑想によって、誰でも同類の物に出会う様になる。イメージ的に夢に近いかも知れないが、夢には無い共通性や客観性が有るのである。

#### （十八） 瞑想で見える上昇天（無色界）

尚、対象には姿が無ければ、人間はそれを経験出来ないものの様に思われるかも知れないが、決してそうでもないのである。栄光、真理、愛情等は姿を持たないが、人間にとっては、最も重要なものかも知れない。また、宗教的神秘体験でよく現われるように、闇や光に包まれたり、言葉では説明出来ない音楽の様な音に導かれる等、物質も姿も無くても、体験者にとっては大変意味深い事も大いに有り得るのである。この様な話はかなり抽象的で、比喩的で、瞑想を知らない人にとっては分からない話かも知れない。しかしそれでは仏教に反論する論拠には成らず、ただ単に凡夫の無知を示すのみである。

仏教を代表する俱舍論では、色界や無色界は三次元の欲界とは全く別次元の領域である。人間の肉体は色界や無色界には行けないし、この三次元の欲界とは非連続的に離れているだけに、それらはとても肉眼でみえる様な存在ではない。寧ろ、意識のみがその別次元に行けて、それを経験できるものである。

優れた人生、極めた善行、清めた生涯によって、人は上界に生まれ変わる事が出来、何千年、若しくは何万年もの間、肉体を持たずに生きられるとされている。しかしこの高次元の上界に於ても、物事を経験する自我（主観的意識）が残存する訳であるし、生死、サンサーラの原則に束縛されている。瞑想中にあちらに行ってきたも、あるいは死ぬ時次点であちらで生まれ変わっても、いずれにしても変化と時間の限界が有る化土の中での存在である。従って、その体験も有限であり、その境地に至っても又再び生まれ変わらざるを得なくなるのである。

### （七） 臨終で見える浄土（応土）

ところが、サンサーラを超越する他界も仏教に非常に重要な役割を持つものである。それを代表するものは、極楽浄土である。一度極楽浄土に往生すると、二度と生まれ変わらないうで、涅槃に入るまでその境地に居られる。極楽浄土の本質は無、あるいは空、であり、その領土の姿形が法蔵菩薩（阿弥陀如来）の念力（願力）に起因する意識の投影である。意識の投影であるからと言って、存在しない訳では決してない。極楽浄土を経験する意識には、五感（感覚）的な刺激や情報伝達を得て、地上生活とは全く同じ位の「実体感」が有る。イギリスの著名な西洋哲学者バークリーやブラッドリー等は、この現実の世が全て神の投影であると論じたが、仏教の極楽浄土も正にその様な発想に基づいている。

但し極楽浄土の場合、経験者の意識によって、感覚的環境が微妙に違って来るとされている。阿弥陀如来の願力で極楽浄土は往生者の希望に応じる様に出来ている。往生者は何か食べたいと思っただけで、その食べたい物が想像通り目前に現われ、それを食べたなら、まるで本物の味、歯応え、満足感等を感じられる。しかし、『観無量壽經』等の古典によると、経験者の「からだ」も対象となった「食べ物」も全て幻覺にしか過ぎないそうである。同様に、音楽



が聞きたいと思えば、その通りの音楽が聞こえるし、あるいは水浴をしたいと思えば、想像通りの深さと温度の川が現われる。前に触れた天国より絶対性は無い変わりに、天国以上の極楽である。

しかも、この幻覚の世界には、それなりの倫理的、宗教的教訓が含まれている。物質欲やそれに基づく競争心がたちまち無意味になってしまふからである。物が欲しいと思っただけでその物が現われるので、山程の物に囲まれても、それだけでは満足感が得られないという事を悟っていく。物によって他人の評価を得られないし、他人より良い物を沢山集めようとする事も想像力のゲームで終わってしまう。逆に極楽浄土で生活する為には何の物も要らないし、物は根本的に人間の幸福に繋がらないという事に気付くと、精神的成長の方にもっと力を入れたくなるのである。そこで瞑想でも組めば、蚊や空腹に迷わされずに、最適な環境で瞑想が旨く出来、自分の内面だけとの戦いによって、六道に逆戻りをせずに涅槃を目指せるのである。往生者心がこのように浄化されるという意味を以て、これは浄土と名付けられ、また阿弥陀如来の願力と往生者の念に応じるという意味で「応土」とも呼ばれている。色界や無色界の存在確認（信仰根拠）と同様に、極楽浄土の存在自体が瞑想と臨死体験とによって確認出来るものであるとされているが、この体験的信仰根拠については後で述べる事にしたい。

仏教徒の多くは、極楽浄土の存在自体を認めるが、それが三界六道以外に有るか否かに関しては、多少の論争が有った。雲鸞が曰く、極楽浄土には欲は無いので、欲界には属さないし、場や接触感の有るので、場や接触感の無い色界にも属さない。更に色は有るので、無色界にも属さない。従って、極楽浄土は三界六道以外に有るという事が雲鸞の結論になるが、これは多くの阿弥陀信仰の宗派にも信じられている。

(八) 涅槃の他界（法土）

漸く極楽浄土を卒業すると、その上にはもう何ら無い涅槃の境地、法土に至る。これは永遠の真理や絶対的理論の頂上でもあるが、空間、形面、個人的存在を全て超越する「領土」である。時間も無ければ、勿論変化も有り得ない所である。これがカントのいうヌーメノン、つまり全物質の根源や裏にある存在の本質であるから、非常に言葉では述べてにくいものである。飽くまでも比喩的表現しか出来ない領域なのである。法土は、物も苦も無いという意味で「透明で居心地が良い」と言われているが、そこでは身体も感覚も無いだけに、それは普通に思う透明さや居心地の良さともまた全然違う筈である。無論、その涅槃の境地である法土に「入る」という表現自体も比喩的なものである。その次元に至るには完全に身体を離れなければならないし、既に個人の自我を亡くして涅槃を得た者は、二度と個別的存在として生まれ変わっては来ないのである。

俱舍論の他界観と日本人の他界観

この日本文化研究センターの研究テーマは、日本人の他界観である。そこで、俱舍論や中国仏教による他界観は日本他界観とは随分遠い存在である、という意見が有るかも知れない。それに関して幾つかの反論を付け加えさせて頂きたい。第一に、日本人は厳密に仏教を信じていなくとも、何気なく無意識に大変深く仏教の影響を受けていると言うことが出来るであろう。初詣と盆踊り、北枕と「右前」、大安と仏滅、日常生活の一番肝腎な処において仏教の

影響が至る処に見つかる。

仏教以外に日本人の他界観を明確に表している哲学や宗教の資料は極めて少ない。日本人の心を探る他の手掛かりは余り無い訳である。聖書やコーランのようなものは日本には無いのだが、それに一番近い存在は恐らく仏教のお経ではないであろうか。確かに、日本書記等の中でも、一種の他界観は神話的に表されているかも知れないが、その理論的な体系や説明は一切なされていない。寧ろ、古代日本人のエリート（インテリ？）が仏教を歓迎した理由の一つは、彼らの信じていた世界観（他界観）を仏教が理論的に説明してくれたからである。

そして現在日本人の宗教的経験や他界に関する気持ちは、必ずこの仏教の他界観のいずれかの次元に当たるのである。筑波大学の学生を対象にした調査によると、ある人は墓地を怖がったり先祖を拜んだり、ある人は往生を期待したり、又ある人は幽霊を見たりする。このような行動からみても、多くの日本人は上述したような他界観を既に持っているのである。無論、考えないで行動を取る者も少なくないが、行動を起こしている間に、その裏にある他界観が無意識の内に進入してしまうのである。日本語の論理や精神的構造を意識しなくても誰もが日本語を喋るように、俱舎論を読んで仏教哲学を意識しなくとも、皆がこのような前提の上に立って生活を送っているのである。

日本人は空論を嫌い、具体的に体験しないと信じない所があるのかも知れない。他界の存在を裏付ける宗教的体験は、仏教的他界観が日本に伝わってからも、盛んに日本人にも体験されるものであった。次に、その体験的根拠を更に具体的に探ってみる事にする。

## 日本における往生思想の受容

平安、鎌倉時代に遡って見ると、日本ではお坊さんは臨床カウンセラーのように、臨終の時に家族を慰めたり、本人を導いたりする教育者でもあった。その役割は室町から徳川にかけて変わってしまいが、例えばお坊さんの手引きであった源信の『往生要集』を読むと、人の死に場所に行く時、「何が見えるかと聞け」とある。もし、死にかける本人が何か見えると言うならば、それを細かく記録せよ、と書かれている。従って、源信の平安時代後期頃から、死ぬ人の最後の言葉を大変重視するようになっていた。例えば源空（法然上人）の恩師である皇円上人は、『扶桑略記』という本を編集したが、その中でそういった話をたくさん記録している。日本では坊主の死に方だけでなく、一般市民の死に方も詳しく記録されている。

そして面白いことには、その死に方の中でよく出てくる例が、先述した『観無量寿経』のそれと非常によく似ているのである。体を離れ、黒いトンネルを通り、キラキラする花園に出て、そこで阿弥陀のような（場合によっては、観音様だの、閻魔大王だの地藏様だの、当時の日本人にとって親しみやすかった名前が出てくる）、少なくとも偉大なる神様のようなものに出会い、そこで何らかの形で反省させられ、この世に戻されたという話が数々記録されているのである。こうした話は『扶桑略記』だけでなく、『元亨釈書』、『宇治拾遺物語』、『往生伝』、『往生極楽記』などといった古典文学の中にもかなりあるのである。台湾あたりに行くと、今でもそういう往生伝みたいなものが作られ続けていて、その伝統が受け継がれている。日本では徳川時代から臨終の記録はあまり集められなくなったようであるが、この裏には、お寺やお坊さんの役割が著しく変わってしまったという要因が潜んでいる。

現代の我々は、『扶桑略記』だの『往生極楽記』といった古典を読むと、昔の人は何と迷信深かったのだらうと思いがちであるが、場合によっては、きちんとした場所、名前、目撃者、日付、細かい周りの話まで記録されていることがある。そこまで細かい記事が書かれているならば、信頼できる話ではないかと考えられるほどであるが、ここでは彼らが本当にあの世を見たのかどうかは別問題としたい。本章の題目を他界観としたのは、来る世があるかどうかという断言をしたくないからであるが、少なくとも死にかけた本人たちには、幻想というにしろ、ヴィジョンと呼ぶにしろ、何らかの生きがいのようなものが見えたようなのである。

## 現代の臨死体験報告

今から十五年ほど前、アメリカの病院の中でもこうした話が数多くあるということを、エリザベス・キューブラー・ロスとレイモンド・ムーディ・ジュニアという人が全く別々に研究して同時に出版した。二人が会った時にはお互いに驚き、面白い対話があったらしいが、キューブラー・ロスという人はスイス生まれの医者で、昔の日本のお坊さんのように、長年臨床カウンセリングをしていた方である。そして数多くの瀕死の患者と対している時には、医者として自分の役割は本人の気持ちを安らかにするだけだという信念を持ち、様々な信仰を持っている人たち、もしくは無神論者であるドイツ人やアメリカ人を相手にしているの、仏教のお坊さんと違って、説法はできない状況にキューブラー・ロスは置かれていた。そこでキューブラー・ロスは、どんどん相手の話を聞くことにした。そして多くの話を聞いているうちに、何とあの世を見てきたという患者に出会うのである。出合い始めるのは今から四十年ぐらい前の話で、その例をコツコツと二十五年あまり集めた結果、とうとうこれは発表してもいいのではないかと考えたので

ある。(キューブラー・ロスの本は読売出版から五冊ほど和訳されており、『死ぬ瞬間』川口正吉訳等有る。)

当時大学院にいた私は、『極楽記』とか『扶桑略記』とかいったものを研究していたが、そこに出てくる話とエリザベス・キューブラー・ロスの報告とにあまりにも類似点が多いので、ひょっとしてこの平安・鎌倉・室町の話は単なる幻想や神話ではなく、実際に今でも人間に出来る体験ではないかと考え付いたのである。そこでアメリカで研究されている臨死体験の内容と分析について、少し考えてみたいと思う。

まず、誰がこういった臨死体験をするのかということを考えてみよう。つまり、死ぬ前にこのようなヴィジョンを見るには、どういう資格や原因があるのかということである。最初に考えられることは、本人の教育に因るのではないかとということである。つまり、本人が死んだら往生するんだと若い時からずっと教えられていたら、当然自分の渴望や期待に因って、死ぬ瞬間にそういう幻想を自分の頭脳で作れるのではないかと、ということである。ところが、アメリカで集められた何千という例をみた結果、不思議なくらいそうした関連性はないのである。また、これは驚くべきことだが、共産主義者、無神論者といった教会には縁のない者でも、しばしばこうした体験をするのである。逆に、毎週毎週たいへん熱心に教会に足を運んだおばあさんでも、誰よりも神様が見たいと願っているが、なかなかそうはいかない人もいるのである。すなわち、こうしたヴィジョンを見るのは、少なくとも子供の頃からの教育や自分の渴望、期待には因らないという訳である。

次に、入院中だからいろいろな薬も飲んでいるだろうし、麻酔薬などもかけられる訳だから、臨死体験は薬の作る幻覚や高熱が作る現象ではないか、とも考えられよう。そこで、病院の協力を得て本人のカルテと突き合わせることで、どうして、どういう薬を何時飲んだかということや、脈拍や脳波やいろいろな身体的要因を加えて、患者の体験の時期を比較してみたのである。すると不思議なことに、逆比率が表れる。つまり、薬をたくさん飲めば飲むほど、また

麻酔薬を強くかけたりするほど往生経験はしなくなり、あるいは高熱を出したりすればするほど、また精神異常になった場合には、逆に往生体験を発言しなくなるのである。すなわち、何の薬も飲んでいなく、体温も普通に全く正常な者こそ、こういう体験を後で発言するのである。勿論、薬、麻酔薬、高熱などといった原因も考えられなくはないが、分析の結果からは、それだけでは片付けられないのである。

## 往生体験と夢・幻覚の違い

では、体を離れ黒いトンネルを通過して花園に生まれるという「体験」が確かに本人にとってはあるとしても、その「体験」は一体何なのか。それは単なる夢のようなものではないのか、あるいは一種の幻想・幻覚ではないのかと疑うことが出来る。そこでまず、普通の夢や幻覚と比較してみよう。

人間は皆、毎晩実は夢を見る。自分は覚えていないという人があれば、それは夢の日記をとる習慣がないからであって、夢の日記をとるようになれば、少しは自分の夢の内容を覚えられるようになる。法然も親鸞も高弁も、昔のお坊さんはみな夢の日記をとっていたのだが、我々も毎晩毎晩夢を見ているのである。

夢のことを思い出して頂ければ、まず大した筋のないことが知られよう。たとえ筋があったとしても、突然背景が変わったり、自分がここにいたと思ったら突然あそこいたり、接しているつもりのあるものが突然別のものに化けたりし、要するに夢には一貫性がないのである。ましてや、自分の夢と他人の夢を比べて見ても、一致する夢などほとんどないものである。だから、フロイドやユングのような精神科医は個性を知るために夢を分析することにしたのである。夢はごく個人的なものであり、自分の心の色々な目的や意図の反映はあっても、他者の意図や趣旨を感じるこ

とは滅多にない。一般化すれば、夢の中では相手の気持ちを感じることは滅多にない、と夢の研究者は言っている。

ところが、往生体験には夢にない一貫性がある。多くの人間が同じような体験を後で発言する。トンネル体験、花園体験、神様や阿弥陀様みたいなものに出会う体験、自分の人生を反省させられる体験。多くの人が言うには、神のような存在の前に立つと、言葉を使わなくても自分の胸の裡、自分の心がそのまま読み取られてしまうと言うのである。そして、その阿弥陀様みたいな存在に対しては、嘘をつこうにもつけないと言う。別に日本語とか英語といった言葉を使っているわけでもないのに、きちんとこちらの思い描くことを感じ取られ、阿弥陀様の慈悲や愛を全身で感じながら、花園たる浄土を案内され、自分はこれからどう歩むべきか、どう反省すべきか、ということを聞かされると言うのである。それも耳で、つまり言葉で聞かされるのではなくて、心から心へ以心伝心のようなもので伝わると言う。このように比較してみると、一貫性、目的意識、そして相手とのテレパシーのようなコミュニケーションという点で、普通の夢とは根本的に違う体験と言えよう。

さらに次のような点も興味深い比較である。夢の中には目が覚めた時に不思議な気持ちになるものもあるが、夢によって自分の人生を変えようとすることは滅多にないであろう。人生に一、二度あれば多い方で、大抵の人間は「あれは夢だった」と済まし、普通通りに生き続けるものである。ところが、往生体験をした患者たちはこの世に戻ると、不思議なほど、曇鸞のように自分の生き方を変えるのである。オハイオ大学のフリン教授が特にこういう例を集めて分析したのだが、無神論者や大した信者でもなかったアメリカ人が往生体験をしたため、体が治った後、急に修道院に入ったり、神父や牧師の勉強をし出したりすることがよくあるのである。日本の大学とは違って、アメリカでは何歳になっても大学に入学ができ、好きな勉強ができる制度が確立しているので、たとえ五十歳、六十歳でも、神父になる道が用意されている。また正式に宗教の道に向かわなくても、それまで名誉や富、あるいは世間の評価を得るた



めに努めていた者が、往生体験を経た後、ボランティア活動、例えば恵まれない子供や孤児のために励み出したり、目の見えない人たちのために点字を勉強し出したりするといったように、往生体験者の多くが困った人を助ける活動に励むようになる。こうしたことから、往生体験というものは、夢と見做すには余りにも大きなインパクトを持つ体験と言わなければならない。

往生体験にはもう一つ普通の夢には見られない現象が潜んでいる。それは、超自然的現象によって超常的知識を得るということである。例を二つ、三つ述べよう。

ある時、セント・ルイスという街でかなりの金持ちが亡くなったが、遺言が残されていなかったために、子孫が財産に関して争い出したことがあった。その時、彼の孫が大変な病氣にかかり、入院した時点でもうお手挙げの状態で医者も諦めたのであったが、皆の祈りのお陰か、奇跡的に蘇った。蘇って来た後、あの世でおいさんに会って来たと、その孫は言うのである。そしておじいさんは、「お前らは聖書を読まないから分かつたらんが、遺言はちゃんと書いて、聖書の中に挟んでおいた」と言ったそうである。それで、親たちが滅多に読まない聖書を引き出して、指摘された箇所を開けて見ると、きれいな薄い紙におじいさんの字で遺言が書いてあった。遺言がそこにあるということを知っていたのはおじいさんだけであり、それまで誰も知らなかった。知っていれば、争いも裁判も避けられたに違いない。そこで謎となるのは、一時的に死んだかと思われた孫がその情報をどうやって得たかということである。普段、その孫には超心理的な体験もなければ、決して靈感っぽい女性でもなく、ごく普通の高校生だったそうである。

次にこういう例がある。アメリカのロスで、オートバイに乗った二十歳前後の青年がダンプにぶつかり、意識不明の瀕死状態になったが、すぐに救急車で運ばれて、色々な医療措置を施されたお陰で、彼も奇跡的に助かって蘇ってきた。そして意識を取り戻した後、あの世でおばちゃんやおじいちゃんに会い、そしてニューヨークに住んでいる

従兄弟のチームにも会ってきたと言ったのである。病院のベッドを囲んでいた親たちは、「確かにおじいちゃんもおばあちゃんも何年か前に亡くなったが、チーム君は今ニューヨークで勤めているはずだし、第一まだ二十数歳のはずだが」と不思議がっていると、数時間後、ニューヨークからチームが先に亡くなったという知らせが入った。その時まで、ロスでそういう事実を知っていた者は一人もおらず、青年の話を聞いた者も、チームは元気でやっているだろうと推測するにとどまっていた。チームの訃報を誰よりも早く知ったのは、この往生体験者だけであった。なお、この青年も、普段から全然宗教的なことなど信じていなかったし、靈感っぽい人でもなかった。普通の夢や幻覚の中では、こうした情報を得ることはないであろう。

また、フランスのある有名な歌手が一時的に亡くなった時に、「お前の死ぬ時期はまだ来ていない」、つまりこの世でまだ仕事をしなければならぬと言われ、おまけに「この女性に出会え。そしてその女性と結婚して、福祉の道を歩まねばならない」と命じられたと言うのである。ところが本人は普段からたくさんの女性に囲まれてばかりいたので、一人の女性など探したこともなかったし、ましてや自分の得意なことは歌うことだと思っていたので、社会福祉のような道を歩むなどということは、それまで考えたこともなかった。意識が戻っても「あれは嘘ではなかったのか」という疑いが晴れなかったが、何カ月も経たないうちに、なんと教示された女性とびつたりの人が現れたのである。要するに、このような予知的な、予言的な知識を得るということも、単なる夢や幻覚と大いに異なることである。

こういう分野がどうしてアメリカで熱心に研究されているのかとよく聞かれるが、その裏には、二十年ぐらい前に非常に流行っていた麻薬の問題がある。今でこそ厳しく取り締まられ、アメリカは麻薬に対して戦っているが、その当時は別に違反でもなんでもなく、ハーバードの教授でさえ、麻薬をよく使ったり勧めたりしていた。その頃の麻薬体験がこの研究の端緒を作ったと言ってもいいのであるが、もう一つのきっかけは、当時のベトナム戦争でかなりの

若者たちが戦場で撃たれ、死に近づく者がたくさん出たということも挙げられる。それまでの戦争であつたら放っておかれたような重傷人でも、医学が著しく発展したおかげで、戦場からヘリコプターで近くの病院に運ばれたりして、蘇生を経験する者が急に増えたのである。そして、彼らの中からしばしば右のような話が聞かれるようになり、それが研究を促すきっかけになったと考えられる。

幸いに戦後の日本では麻薬の問題も戦争の経験もないが、防衛大学の教授が第二次世界大戦の戦場で集めた話の中に、多少類似した話を見つけることが出来る。

## 往生体験の意味と応用

先述したように、他界には死——ある意味ではこの世の終わり、ある意味ではあの世の入口——という意味と同時に、死ぬ時の行為——自分の胸の裡の動きも相手の胸の裡の動きも含む——つまり動詞的な意味がある。そして我々にとって大切なことは、この往生体験をどのように理解し、どのように応用すればよいかということである。最後に、その応用の面をいくつか考えたいと思う。

まず最初に理解しておくべきことは、自分の体を離れながら、この世と共にあの世をも体験している患者が大勢いるということである。現在、脳死を判定するには、六時間連続で脳波を計らなければならないことになっており、一時的に脳波が止まっても、脳死とは判定しないのであるが、その脳波のない状態で往生体験をする者がいる。あるいは、脳波がごく遅い、何の反応もなく死に近い状態を示している時にも、視覚、聴覚、場合によっては嗅覚や味覚の体験さえしていたと、後で蘇生した本人が言うことがある。こういうことは、仏教においては別に何の驚くべきこと

でもないのであるが、今の一般常識から見れば、頭脳と切り離された体験などあり得ない筈であろう。しかし往生体験の研究から導き出されるところによると、頭脳が働いていなくても、別の意味の意識、それは仏教で言うならば「阿頼耶識」ということになろうし、欲っぽく言えば靈魂ということになろうが、それを何と呼ぶにせよ、何か存続するものがあると考えざるを得ないのである。その存続は、果たして永久的なものなのか、それとも一時的なものなのかといったことは全く分からないが、少なくとも次のようなものの方が出来るようになるのではなからうか。すなわち、人間は単なる機械のような物ではなく、体を離れても何らかの意味で生き残り得る存在であるということである。

こうしたものの見方は、一つには歴史的な古典を読む視点を変えるであろう。例えば仏教のお経や『扶桑略記』などを読み直す時でも、そこに記されている話がただ単なる作り話や神話ではないと見做すようになるであろう。当時の人間は我々ほど物質的には恵まれていなかった代わりに、あの世を見る眼を持っていたかも知れないのである。

次に考えられる応用は、突拍子もないことと思われるかも知れないが、自殺防止ということである。私の勤めていた筑波大学は創立十五年目になるが、当初は色々な心理的な原因で自殺がきわめて多かった。幸い今では国立大学の平均より下になったが、そのようになったのも、裏で自殺防止に励んでいる教師が多いからである。実際の自殺防止教育の場面においては、この往生体験の話はたいへん役立つものなのである。それには二つの理由がある。

一つには、人はこの世や人間が嫌になり、自分の存在自体も嫌になって、それから逃げたい、無になりたい、という気持ちから自殺を図る。ところがシェイクスピアのハムレットも言うように、もしもこの世が最後でなく、別の形でこの人生が続くのであれば、必ずしも来世がこの世よりも好ましいという保証は何も無いであろう。そう考えるだけでも、今の苦しさに変わりはないのに、自殺を取止める青年が中にはいるのである。

自殺に失敗した自殺未遂の人を特に研究しているコネティカット大学のブルース・グレイソンという親友がいる。ブルースの話によると、自殺未遂者に限って、先述した往生体験が異なっている。往生体験が無いと言うよりも、黒いトンネルまで行くが、それが永久に続くかのようにトンネルの中に閉じ込められてしまうと言うのである。アメリカの自殺未遂者によると、暗い宇宙の中にぶら下がっていて、前に行こうと思えば前に行けるし、上下左右に動こうと思えば動けるが、そこには何も無いと言う。何か気味の悪い物がいるような感じもするけれども、それと連絡することも出来ない。そして、大体自殺する人は寂しがり屋の人が多いようであるが、この世で感じた最悪の寂しさと比べても、比較にならないほどの寂しさを感じたと言う。こういう話をたくさん集めて自殺を考えている学生などに読ませると、かなりの者が考え直してくれるのである。

三つ目に考えられることは、往生体験はもともとキューブラー・ロスが臨床の過程で注目するようになったことから判るように、臨床カウンセリングにかなり役立つということである。普通の人間であれば、誰でも心の底に死に對する恐怖を持っているであろう。死にたくないという気持ちは、動物的本能としても強くあるはずである。従って、不治の病氣にかかって後は痛みを耐えるだけの存在となった末期患者は、その肉体的痛み以上に、死への恐怖を非常に強く感じるようになる。痛みはどうか耐えられるけれども、自分が死んでこの世からいなくなってしまうという思いは、とても耐え難いのである。しかし、往生体験をした人の話を末期患者に優しく話すと、多くの場合、はっきりした表情になり、精神的にたいへん安らぐと言う。患者が安らかだと薬もよく効くようになる。医者も看護婦も楽になる。そして本人が治っていく場合もあれば、たとえ亡くなっても、より安樂的に平安に亡くなるわけである。だからこういう意味においても、往生体験はより広く応用出来ると思うのである。もともと仏教のお坊さんも、正にそういう意味でのカウンセリングをしていたのである。

## 日本の医学とカウンセリング

西洋の病院には、体だけを扱う医者と共に、精神科の医者や宗教家もいる。人間の肉体と精神の二元論は、プラトンが始祖かも知れないが、デカルト以降ははっきりと分けられて定着した。デカルトが言うには、動物は勿論そうだが、我々の肉体はあくまでも機械であって、精神は全く別な靈魂みたいなものである。従って、西洋の病院には神父や牧師が自由に出入りし、死に至る患者のカウンセリングをする。無神論者だと言えば、精神科の医者とは相談できる。最近、日本の新聞でもガンの告知の問題を取り上げ、果たしてガンの患者にガンだと知らせるべきかどうか、という議論が激しくされている。私から見れば、問題の核心はそうした議論には無い。日本の医者は一人の患者に一日平均二分しか会っていないと言われているが、その短い間に、「あなたは難しいところにいるのです」と言うのと、「あなたはガンです」と言うのとでは、大した変わりはないように思う。この問題の核心は、患者の心を安らげるために、いかに優しく納得いくように話をするか、いかに患者が頑張らなくなるような心を育てるか、ということであるが、日本の医者はそういう教育を受けて来ていないので、急に「そうしろ」と言われても無理であろう。

西洋の病院でも医者は大変忙しいので、各患者に対して三十分も時間をかけるわけにはいかない。そこで、牧師、あるいは精神科の医者に対して、「この患者はガンなんだけれども、彼の精神に合わせた言い方で伝えてほしい」と頼めるのである。頼まれた牧師や精神科医は、ゆっくり患者の話や悩み事を聞いて患者の精神をよく知った上で、ガンへの心の準備ができた頃を見計らい、一人の友人として、優しい言葉で「実はそうなんです。考えておられる通りガンなのですが」と言えるようになる。これだけの準備があればこそ、ガンの告知をしても患者のショックをかな

り和らげることが出来るのである。

明治維新以降、日本は全面的に西洋医学を取り入れることにしたが、西洋医学の物質的側面にのみ関心を向けた。そこで病院には、神父や牧師は勿論、精神科医さえ入れなかった。決して日本にキリスト教の要素を入れればよかったなどと言っているのではない。ただ患者の精神的な面をもう少し考える必要があったのではないかと思うのである。日本の徳川時代の医者は、物質的なことのみならず、正に精神を相手にする、いわば老賢者のような存在であった。当時の医学はある意味で乏しかっただけに、深く一人一人の患者と接して患者の心身をよく探りながら、薬の調合や治療を進めたのである。時代劇を見ると、時々そういう医者が出てくるが、大阪大学の前身であった適塾などにも、そういう精神のあったことが伺える。だから私は、西洋の病院を真似しろと言うよりも、むしろ日本にあったもともとの精神をもう少し思い出してはどうか、と言いたいのである。

去年、昭和天皇がお亡くなりになった。我々は日夜、陛下の脈拍や呼吸数、輸血の量などを知らされた。そうした扱いがたいへんお気の毒なように見え、ある意味で非人間的なように感じられたのは、私だけであろうか。ところが、今の日本の医学で為し得ることは、そこまでののである。医学はあくまでも人間を延命させることを使命とし、それ以外のことは育てて来なかった。それ以外のことを医学に頼んでも、無理な願いなのである。

そこで往生体験のもう一つの応用として考えられることは、身体の延命だけに価値を見るのではなく、別の意味で人間の価値を見出すことである。「量より質」というものの見方は、日本の伝統でもあったはずである。例えば、平家が壇ノ浦で敵に囲まれ、もう敵に切られるしかないとき、彼らは自ら切腹したり、あるいは入水する方を選んだのである。また大坂冬の陣では、徳川軍に囲まれた豊臣秀頼やその母たちは、もう逃れようもないと悟ると、自尊心をもって潔く亡くなる道を選んだ。つまり、彼らにとって死が問題になるのは、それがすべての終わりだからで

はなく、自分の人生という作品の終わり方として重要だということである。その死に方を通して人間の本质が知られるということとは、仏教でも昔のインドのお経でも言っている。

今日の医学環境のもとでは、九割以上の人が消毒液の臭う病室で亡くなる運命にある。多くの人は自分のベッドで、あるいは自分の寝慣れた畳の上で、阿弥陀の来迎でも見ながら死にたいと思っているであろう。昔の末期患者は縁側のすぐ近くに座ったり寝ころんだりして、西方からの阿弥陀様の来迎を待ち受け、往生してあの世に連れて行ってもらえると信じていた。そういう観念は我々にも多少残っていると思うが、阿弥陀様が消毒された病室に来るかどうかは疑問である。何しろ医者には阿弥陀どころか、霊魂の存在さえ認めてない。お坊さんが袈裟を掛けて病院に入ろうとしても、縁起が悪いと言われて拒否されるのが落ちである。

こういう状況に対して我々に出来ることは、少なくとも命を時計だけで計ることを止めて、命の質、命の内容、命の意義を考えるようにすることである。日本の尊厳死協会は既にこの方向へ歩もうとしているけれども、まだあまり多くの参加を得ていないようである。

## おわりに

最後にもう一つ、往生体験は子供の教育にも応用できると思われる。「えっ、往生体験って死ぬことですよ。子供に死の話をするんですか」とよく聞かれるが、死を考えることは、たとえそれがお終いであるとしても、それまでに何をするか、何が出来るかということを考える契機となろう。そして、往生体験をした者の話を聞くと、この世にいた間にどれだけ金を稼いだかなどということは、どうでもよく思えて来ると言う。またどれだけ出世したかと



いうことも、どうでもよくなる。この間、筑波で半年ほど昏睡状態に落ちた少年がやっとのことで意識を取り戻し、見事に典型的な臨死体験をしたことがあった。彼の話を聞いてみても、それまで親に言われるままに学校の成績を上げることばかりに努めていたが、臨死体験を通して、どうも人生はこの世だけではないと気付き、兄弟に優しくしたり、周りの者を大切にする心が、子供なりに生まれてきている感じがすると言う。

日本が最近しばしば言われるように、成績、金銭、時間といった、要するに単位で計れるものばかりに束縛されているように思われる。自分の人生は何のためにあるのかということをも、もう少し広い視野で考えるならば、もっと豊かで、精神的に誇れる人生を送ってもらえるのではないかと、私は願って止まないのである。